統一

第壹四八號

（明治三十年二月廿四日第三種郵便物認可
明治四十年五月十五日發行第一號
毎十五日一回）

廣告

清瀨貞雄師師摩港出養生中の處診査醫の勸告に依り面會談話及書面の往復等を禁ぜられたるに付當分の內御來訪及見舞狀たりとも一切御斷り申度自然要件を具備したる書面と雖とも本人へ取次かす直に返付可仕候間不悪御承知置被下度豫め廣告仕候也

明治四十年五月

清瀨看護者

腦脊髓
精神病

帝國腦病院

東京市神田區和泉町
（電話 下谷七一七番）

院長ドクトル齋藤紀一明治卅三年專門學研究の爲め獨逸へ留學卅六年同大學卒業尙進て英佛專門病院を視察兩院にて診察す

精神病 專門

青山病院

東京市青山南町
（電話新橋三六四五番）

（三法堂目印）

木像具
金佛具

木像 大販賣

廚子

佛書表具の元祖各宗御寺院御入用品一切何にても多少に限不御注文仰付らるべし佛書は申すに不及御肖像書專門

木魚位牌卸小賣

小包條例附
郵券四錢

三法堂諸品發賣目錄（正價付）

佛書佛具佛像位牌木魚其種類品有之候を以て一々記載する能はず依て特に佛書正價附發賣目錄書を作製致置候に付御入用の諸君は郵券四錢御送付被下候はゝ迅速進呈仕候此の目錄御用ゐになれば寺院樣方の御入用品一切の買物何程遠方でも座ながら安價にて買はれ申其の正札附の品は左の通り

●地藏菩薩一切●過去帳の類●大般若經●一切高經●理趣分●位牌●太鼓●扇子●佛具金物一切●釣鐘●半鐘●木魚●沸子●曲錄●香●球●數●傘●中啓●雪洞●鈴●鐘●水引打數●杖●幡●人天●蓋●樂器類●鬼●幡●屋根●木金類●廚子●木草●經机●幡●唐幡●字●聽●磬●行●鉢●量●器●自鉢●正價にて

佛具一切●過去帳の類●大般若經●一切高經●理趣分●位牌●太鼓●扇子●佛具金物一切●釣鐘●半鐘●木魚●沸子●曲錄●香●球●數●傘●中啓●雪洞●鈴●鐘●水引打數●杖●幡●人天●蓋●樂器類●鬼●幡●屋根●木金類●廚子●木草●經机●幡●唐幡●字●聽●磬●行●鉢●量●器●自鉢●正價にて

書具一切●過去帳の類●大般若經●一切高經●理趣分●位牌●太鼓●扇子●佛具金物一切●釣鐘●半鐘●木魚●沸子●曲錄●香●球●數●傘●中啓●雪洞●鈴●鐘●水引打數●杖●幡●人天●蓋●樂器類●鬼●幡●屋根●木金類●廚子●木草●經机●幡●唐幡●字●聽●磬●行●鉢●量●器●自鉢●正價にて

注意

佛具表具師
各宗御用大書
東京入下
全町小橋
京都中島町西入
通小橋三條
御用達
各宗御本山
自由自在、振替貯金口座第一〇七一番

三法堂 藤田總治
三法堂陳列所

佛教の統一的釋義

（本篇は本年四月京都總本山に開催せられたる本宗西部講習會に於ける講演筆記なり）

大僧正　本多日生師　講述
法弟　梶木日種　筆受

（一）序言——（二）佛陀出現の目的——（三）佛教經典の歸趣——（四）佛教行法の歸趣——（五）佛教教理の歸趣——（六）統一本尊の顯示——（七）結論

第一章　序言

人類に宗教の必要なる事、人類は宗教的信仰なくして完全なる生活を營む能はざる事は、今日に於て識者間に異論なく、而して宗教その物は、昔く人類に對して完全なる教化を施し、適當なる感化を與ふるを以て本領と爲す事も亦異論なし。抑も世界の宗教はその種類多々なりと雖も、佛耶兩教は實にこれ等幾多の宗教中に傑出せる高等の大宗教たるなり。而して耶蘇教は、教義を應用する上に於て十全なる發展を遂げ、實際の活動又頗る見るべきものあり。是れ實に彼れ耶教の長所なるが、その教義の根底に至りては、脆弱にして智力上の滿足に價ひせざるものあり。是れ彼

れが短所なり、我が佛教は之れに反して、その教義の根底深遠にして、能く理性に滿足を與へ、又長き歴史と廣き版圖とを有して、幾多の偉人を産出し、隨て人格の感化も亦侮るべからざるものあり、然れども應用に於て缺陷極めて多く、信仰も亦錯雜不統一なるが爲め、現に不振の狀態に在り、彼れ耶教の缺陷は、教義そのものゝ上に存するが故に、他より之れを改廢せずしては、匡救する能はず、我が佛教の缺點は教義の根幹にあらずして、應用の上に人爲の盡くさゞるあるに由るが故に、一たびこの缺陷を自覺し補足せんには、即ち佛教は完全圓滿なる大宗教として、優に世界に獨歩するを得ん、されば今若しその教義の如何を問はずして、只感化の末に就いて判定せんとならば、暫く耶教を推すべし、然れども將來の宗教として、何れが眞價を有して有望なりやといはゞ、佛教を推すも敢て偏見と謂ふを得ず

惟ふに吾人は、佛教教義の應用發揮を勗め、向後益す社會に奮鬪活動すると同時に先づ佛教教義に對し統一的解釋を採りて、現下の佛教各宗派を覺醒し、これをその曖昧摸稜なる分裂狀態より救ひ出だし、由て以て世界に疎んせられつゝある吾が佛教の振興を計らずんばあらず、佛教はこの統一的解釋に由りて、始めて眞乎生命ある大宗教として社會人生に對して完全なる教化を施き、適當なる感化を與ふる

を得ん豈に勵まざるべけんや

佛教興立の活案は、實に佛教教義の統一的解釋より來るべく、又この統一的釋義に由りて教義紛爭の解決を見るを得て、生氣ある活動を望むべきなり

佛教の重要教義とは、(一)佛陀出現の目的、(二)佛教經典の歸趣、(三)佛教行門の歸趣、(四)佛教教理の歸趣、及び(五)佛教本尊の顯示是れなりとす、その佛教教理とは、法界觀、人身觀、及び佛陀觀を包含せり、而してこれが統一的釋義の經典としての根據は實に法華經なり、その釋書としては、天台、日蓮の主張を精研するを要す

吾人はこの經釋に據りて、能く時代に適當なる應用を試むべし、假りに社會の道德は完全に勵行せられ而かも高遠なる理想の方面廢頽せる時は、この場合に於て宗教は當に高遠なる理想を鼓吹すべく、かくて漸く理想に偏傾して實踐の道義を失はゞ、其處に溫かき道德的信仰を教ゆべく、若し徒らに社會的慈善に熱注して高遠なる教義を忘るゝならば、宗教は宜しくその缺陷を補ふべし、要するに宗教は社會の缺陷を補ひ、時代の偏傾に對して每に平衡を保たしむべく適切なる應用を試み感化を施すべきなり

法華經が統一的經典たる所以を示さば、先づ法華の序分無量義經に曰く

無量義とは一法より生ず(一)

一切の諸佛は二言有ると無し、能く一音を以て普く衆聲に應じ(二)能く一身を以て百千萬億那由他無量無數恒河沙の身を示す(三)

(一)は佛教教理の統一を示し、(二)は佛陀は終始一貫せる眞理を說き給へるも、諸衆各その解釋を異にするに過ぎずして、佛教は元來統一的宗教なるの意を示して經典の統一を明かし、(三)は佛身觀の上に大日、彌陀等の諸佛多神の名あるも、これ全く一身を以て無量身を現じ給へるものにして、統一的多神なることを明かせる文なり

又法華經の序品に於ける佛陀放光の中に、諸佛の說法、六道の生死、三乘の得道、菩薩の修行等、總ての行相を照らし出だせるは、これ佛教統一の的證なり、又方便品の四一開會は教行人理の統一を說き、譬喩品以下は之れを譬說す、又本門壽量品の開迹顯本は佛身觀に於て釋迦を中心として諸佛を統一し、尙ほ迹門四一開會の理想を進めて根本的に之れを解釋し、即ち人開會と果法光顯の二大要義を顯はして、佛身(果法)、教法(教法)、法界(理法)、人身(人法)及び行法(行法)の諸觀の統一を教示せられたり

天台の釋義は法華經中心の統一的釋義にして、その一念三千論は、以て觀念系の統一を示せり、章安歎じて云ふ、天竺の大論尙ほ其の類に非らず、震旦の人師何ぞ勞はしく語るに及ばんと、天台は實に空前の達見を示せる佛教統一の唱道者なり、而かも尙ほ飲點なきにあらず

その法界觀は、理論に馳せ冷靜なる眞如に向ひて、佛界緣起の妙觀を遂し

その人身觀は、佛陀を先覺者と見て智的關係を說くに止まり、父子天性の關係と、圓慈觀とを發揮せず

又佛身觀は、三身相即を云へども、慈悲中心の佛陀にあらず、久遠實成を云へども無始實在の具體的佛陀にあらず

教法觀は、開權顯實の判釋あるも、行門上に偏面を併用して、權實の區別究竟せざるあり

隨つてその行法觀は、頗る曖昧となりて、遂に權實雜亂の大弊害に陷るに至れり

要するに天台の統一的釋義は、消極的にして積極的にあらず、特にその大飲點ともいふべきは、佛陀出現の目的明かならず、徒らに山林佛教として絕待面の觀念にのみ耽り、遂に人生と交涉を絕たんとす、而して又本尊に就ては、或は法華經を安置し或は彌陀、觀音、藥師等を本尊とし、殆ど確立せる本尊を有せず、されば天台の統一的釋義は、未だ圓滿究竟の妙義と稱するを得ず

日蓮上人の統一主義は、天台に於けるこれ等の不整備未究竟なる總ての缺點を補充して、超然として積極的統一の解釋を示せるなり。今之れを列示せん

佛陀出現の目的　二世救濟統一の目的
教法觀　一代一經統一の妙典
行法觀　世出兩善統一の妙行
　　信法二行統一の妙行
法界觀　佛界緣起統一の妙觀
人身觀　父子天性統一の妙觀
佛陀觀　應身爲正統一の本佛
本尊觀　輪圓具足統一の本尊

この題目に就いて、以下章を別ちて詳述せんとす

第一章　佛陀出現の目的

今日佛教を研究するもの多くはその軌道を誤まれり。佛陀出現の目的を狹小に解して、或は佛陀は單に吾人の未來に於ける成佛を得せしめん爲めに出現せられたりとし、或は只人生の光として救世の爲めに出現せられたりとなす。これ等は皆一個の偏見に外ならず。何となれば、由來佛陀は人生生活の上に幸福を實現し、愛ねて未來永遠に常住不滅の佛果を成就せしめんが爲めに來り給へり。人生生活の幸福と未來不滅の成佛との二世救濟の目的を以て佛陀出現の眞目的と認むべきは論なき所なり

今一歩を進めて之れを研尋せば、佛陀は圓滿なる慈悲を有し給へるが故に、啻に人生と未來の救濟に止まらず、無始より已來常恒に吾人の上に慈悲の光明を放ち給ひつゝあるなり。彼のクリストの神は、吾人の生前に就いては何等說く所なきも、我が佛陀は三世の妙益にして、假りに進化論者の說の如く吾人が動物より進化して人類と成れりとするも、尙ほその原始時代より未來成佛の曉に至るまで幾億萬劫の間遠々永々の間、間斷なく、佛陀は慈光を與へ給ふなり。而して佛陀は極苦に惱める地獄の衆生を救濟し給ふと同時に、うの教の御手は親しく吾人人類の生活の上にも及びて、幸福と快樂を賦與し圓滿平和なる狀態に安んせしめんと欲ぼし給ふ。これを佛陀の圓慈といふ(圓慈の說明は、法華經壽量品、涅槃經、天台の玄義、涅槃會疏等に詳なり)

佛陀の圓慈は單なる慈悲に非ず。眞理も善德も天地法界森羅萬象、悉皆斯の圓慈の

光明中に包容攝理せられあるなり。法華の壽量品は眞理を說けるのみにあらずして、實にこの圓慈の妙法を說けるなり。如來秘密神通之力の聖語即ち之れなり。佛敎の生命復た實に此に存す。壽量品に敎ふる所は、如來は一切の本源にして、又智惠あり慈悲あり活動ある妙体妙用の聖者なり。哲學にまれ、宗敎にまれ、その奥底に秘密の方面ありて存す。而して壽量品に示せる秘密の奥底とは即ち如來の秘密なり。如來を以て最後の秘密藏となす、即ち如來の上半面は秘密藏にして、その下半面は神通力なりとす。換言せば秘密は如來の体にして、神通はその用なり。如來秘密の妙体は即ち發動して神通の妙用を存續せり。そこに慈悲の意輪は發動しつゝ、身輪の應現となり、口輪の說法となる也。如來体用不二の人格は慈悲の應現にして、その說法は理談に止まらずして救濟の力なり。かくて法界を觀ずれば、咸く是れこの溫かき如來圓慈中に包籠せられつるを知らん。圓慈の其處に眞理の光あり。圓慈の其處に智惠の光あり。之れこれを圓慈觀と云ふ

されば壽量品の初には威應の妙義を明かせり（玄義六、應威妙の下參照せよ）

我れ佛眼を以て其の信等の諸根の利鈍を觀じ云々、と（聖語錄十）

迷へる群生は、佛陀の眼睛には如何に映せしか、他なし苦海に沒在せる可憐の子なり。如來三輪不思議の大化は起らざるを得ず。釋に曰く

慈悲、身口に薰じて、即ち二身の示現と、二鼓の宣揚と有り。と

この釋文を準繩として、以て全佛敎の敎義を窺はゝ、佛敎の眞意を會得すると難からず、釋に又曰く

應は多しと雖も、慈に過ぎたるはなし。と

佛陀の應現活動は無限にして、或は地獄に入り、或は人間に生れ、種々變現活動し給ふも、皆是れ慈悲の發動に外ならず。されば涅槃經に曰く

一切衆生の異の苦を受くるは、如來一人の苦なり。と（錄一七四）

斯の如く佛陀は如何なる場合に在りても、常に慈悲救濟を念とし給ふを知るべし。然るに佛敎を誤解するものは謂へらく、小乘敎は空寂涅槃を理想し、現實の社會と隔離して山林に閉ぢ籠り、徒らに思索に耽るものなりと。されど小乘入門の初めに在る五停心觀の中には、慈悲觀、念佛觀ありて、慈悲心を起し或は現見の佛陀を觀ず。されば小乘を空寂の一面に見るは、佛陀が慈悲の體現者として存在せらるゝをすら知らざるの謬見のみ

彼の禪宗は、自から佛心宗と稱し、空觀に耽りて絕待の一面に傾き、一圓相を畫きて

はこれを皆空なりと解し、本來無一物と叫ぶ。而かも佛教の實歸たる壽量品又は涅槃經の眞意より見れば、この一圓相は正しく佛陀の圓慈を表するものにして、佛心と、は實に圓慈の大活動なり。されば公平に佛教學上より批評せば、彼れが默識神通虛無恬淡自から高かしとするは、全く佛心を誤解せる者と謂ふべし

又淨土宗は、彌陀の誓願を偏崇し未來往生に懇々として、毫も人生救濟の佛意を知らず。彼れは彌陀六八の願を超世の願と誇れども、佛陀出現の大目的より考ふれば、四十八願の如きは本佛慈悲海中の一滴水にして、往生の一端を示せるに過ぎず。されば、淨土門の如きは一個の見解として見るべきものにして、決して宗旨として一の團体を形成すべき價値を有せず

要するに觀念系の思想は、佛陀は絕待面の智慧を吾人に與へんが爲めに出現せられたる先覺者なりとし、現實社會とは全く交渉を絕ち、又佛陀には救濟の神力あるとを邊せり。即ち惠燈明として眞理の紹介者と仰ぎ、遂に絕待の一面に偏傾して哲學的冷靜の思索に安んずるに過ぎず

信仰系も亦成佛往生のみを重じて、人生を輕しめ、又感應の源を忘れて、或は多佛散漫の信仰に、或は一佛一菩薩に、或は一文一句の經文に、或は眞言總持の文字に流れ、その俗信は、現在非理の冥福を求めて菩提心なく、又形式的の利益を求めて精神的の光と力とを求めず

我國現在の佛教各宗は、觀念系にまれ、信仰系にまれ、通じて如斯陋態に陷り、佛教徒としての正義正道を自覺せるもの甚だ稀なり。哀しべきにあらずや

佛陀出現の目的を示せる法華經の本文としては、從來多く方便品の開佛知見の文を引證して、只成佛の一面のみを出現の目的と認め、隨て譬喩品の三車大車は三車を與へずして大車を賜ふもの、化城喩品は即滅化城なれば、孰れも未來絕待の一面成佛の大道を教へんが爲めに出現せられたりと解して、こゝに人生の救濟を邊せり。斯の如く解釋するは在世的佛教にして、所謂在滅判に於ける在世爲正教なり。蓋し在世は迂廻の機なれば、佛陀は自から當時の人生社會を救濟して後、絕待の奥義を開宣し給へることを忘るべからず

若し夫れ滅後爲正教の中に於て、末法爲正教の主義より論せば、今日を中心として見るが故に、佛教は現實の人生社會を救濟すべきと勿論なりとす。換言せば何等佛陀の化を被らざる、今日の人類社會の總てに對して教化を布くと、これぞ末法爲正の佛教にして、之れ日蓮上人が吾人に教へられたる法華經なり。彼の天台は多く在

世判に依るが故に、開三顕一と稱して三乘を擧ぐれども、現存せざる三乘を開會すとも何の益かあらん。而かも方便品には、五乘開會の活談あるにあらずや(三乘に人天乘を加へて五乘とす)その人乘即ち人道たる現實社會の相待善を、この法華の絶待善に接合するを名けて俗諦開會の妙旨と云ふにあらずや。これ上人の末法爲正立正安國の實際的宗教の起る所以なり

又法華經藥草喩品には、佛陀出現の目的は、正しく現當二世の救濟にあるとを明示せり

我は爲れ如來兩足の尊なり。世間に出づるとは猶ほ大雲の如し。一切の枯槁の衆生を充潤して、皆苦を離れて安穩の樂、世間の樂、及び涅槃の樂を得せしむ(錄二)

是の法を聞き已つて、現世安穩にして後生善處ならん。道を以て樂を受け、亦法を聞くとを得ん、と(錄五九二)

涅槃樂と後生善處とは、未來の成佛を指し、世間樂と現世安穩とは人生に於ける總ての煩悶懊惱より脫れて宗教的生活に入り、所謂道を以て樂を受くるなり。彼の「疏食を飯ひ水を飲み、肱を曲げて之れを枕とす。樂亦其の中に在り」といへるもの顏回の如き聖にあらずば能くし得ざる所なるも、而かも宗教の信仰は道德以上の力

ありて能く老蘊野翁をして、聖賢君子人已上の慰安を享けしむ。これ宗教の人生に必要なる所以なり

譬喩品に「今此の三界は皆是れ我が有なり、其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり、而かも今此の處は諸の患難多し、唯我れ一人のみ能く救護を爲す」(錄一三〇)と示し、自我偈に「我も亦これ世の父、諸の苦患を救ふ者なり」(錄一三一)と說けるもの啻に未來の苦難を救ふ、永遠の救を意味するに止まらず、近く現實の社會人生をも救濟し給ふ佛意なること明なり。されば藥王品には明かに現在と未來との兩面に別ちて救濟を說けり

能く衆生をして一切の苦、一切の病痛を離れ(現在)能く一切生死の縛を解かしめ給ふ(未來)(錄一一)

病即ち消滅して(現在)不老不死ならん(未來)(錄五九三)

是の經法を聞けば病即ち消滅し衆の患あるとなけん(現在)是の功德に因て後ち正眞に致りて老病死なけん(未來)、と「正法華經の文」

又普門品には、人生に於ける幾多の煩悶、苦痛、迫害、危難、困厄等を枚擧して、能く世間の苦を救ふ」と說けり。これ觀音因人の三輪に約して、本佛果上の三輪の妙化を況顯

せるものなり。以上は佛陀出現の目的は、現當二世の救濟に在ることを證する法華經の明文なり

更に進んで日蓮上人の指教を示さば、上人は實に末法爲正二世救濟の實行者なり

一切衆生の一切の苦を受くるは、悉く是れ日蓮一人が苦と申すべし（八幡抄、錄四七八）

先づ生前を安じて、更に沒後を扶けん、と（安國論、錄三八五）

上人は如斯二世救濟の慈愛を以て、三十年間一日も間斷なく孜々として斯の溷濁の人類に對して、適切なる教訓を垂れ給ひしなり。曰く

觀音尙ほ三十三身を現じ、妙音又三十四身を現じ給ふ。教主釋尊何ぞ八幡大菩薩と現じ給はざらんや。と（八幡抄錄、一五七）

即ち本佛釋迦牟尼の大慈悲救濟の力は、隨他の慈悲として茲に八幡大菩薩と現はれて、日本の國家を擁護し國民を救護し給ふ。汝等日本國民たるもの、その罪惡不善の心より離れて、一念善良なる思想を發起し來るの時は、正しくこれ佛陀慈善根の活力が吾人々心の上に加はり來れる實證なりと示され、又

現當二世を成就する當体蓮華の誠證云々（當体義抄、錄一八五）

と示さる、未來の當体蓮華は即ち修顯得体の成佛にして、現在には人類としてこの宗教の信仰に入り光ある生活を成就すべきを教へ給へるなり

深く世法を識らば、即ち是れ佛法なり（錄五〇七）

天晴れぬれば、地明かなり

宮仕を法華經と思召せ、と（錄五〇七）

これ等の教訓を見れば、即ち法華の信仰が人生の上に應用せらるゝ時は、吾人日常の生活はこゝに靈化せられ、一擧手一投足の微も尙ほ光あり力あるものとならん。されば上人は人生尊重の意義を示し給ふこと切なり

閻浮第一の太子なれども、短命なれば草よりもかろし。日輪の如くなる智者なれども、夭死すれば生ける犬にも劣る、と（可延定業抄錄、一七）

要するに人生には幸福の生活に入らしめ、顧がて未來には常住不滅の涅槃を得せしめんと欲ぼすもの、これ實に佛陀出現の眞目的たるなり

第三章　佛教經典の歸趣

第一　教相判釋に就いて

佛教經典の歸趣を明らむるに就いて二種の綱領あり。一は教相判釋に就いて、二は

經典の信仰に就いてなり

教相判釋に就いて云はゞ、多くの佛教判釋は、主としてその力を差別面に專注して統一の方面を遺却せり。尙ほ差別面に於ても正確なる判斷を得たるもの少なし。然るに日蓮上人は差別と統一との兩面に亘りて極めて正確なる斷案を與へ給ひぬ如來一代の說教を一經と見、そこに統一を示し、一代藏經を統一の妙典として、その中心を法華經に採り、以て佛教の眞意義を發揮し、又各宗の分裂を審判して歸一を宣し給ひぬ

佛教史を案ずるに、印度に於ける小乘の上座部の保守主義と大衆部の進步主義との論爭は遂に幾多の分裂を來たし、後來佛教の發展に一大障害を與へぬ。次いで大小二乘の論爭となり、小乘の三藏系に對して、大乘の別教系は差別的見解を固持し排他の思想を骨張しぬ。一方に圓教系出でゝ融通思想を以て共通點を發見せんと勗めしも、般若の法開會の如き只理論面にのみ止まりて、事實の上には機根を別ち行門を異にせり。これ即ち半圓なり、平圓なり、雜圓なり、不純圓なれば、佛教解釋の上に尙ほ衝突を存せり、而して獨り法華開顯の思想は、純圓にして凡べての統一を示されたれば、茲に全く統一的見解を得べきも、天台の教調は尙ほ消極的統一に止まれる缺點ありて究極の義を盡さず、日蓮上人出づるに及んで一段の研磨を加へ、一轉進して積極的統一主義を遺憾なく發揮し給ひぬ

今各宗現行の判釋を批評せんに、孰れも尙ほ昔時の舊夢より醒めず、朦朧として五里霧中に彷徨しつゝあるものゝ如し。眞言宗の顯密判は、釋迦教を排して別に大日教ありとす、その身釋迦教徒にして斯かる見解を立つるは正しく反抗思想なり、叛逆思想なり。淨土宗の聖道、淨土の二門判は、彌陀以外に劣機を救濟する教なしと思へるに基因するも、凡そ佛陀は凡夫を救濟するの力を有せざるなく、又人生の救濟は實に佛陀出現の眞目的にあらずや。何が故ゾ彼れは本佛釋尊の力を非認し、又人生救濟の光を無視するや。華嚴宗の五教判は、天台の四教判に倣へるものにして、彼れが獨創の見にあらず。彼れは法華を同教の一乘、即ち統一的の經なりとして之れを卑しみ、華嚴は統括を離れたる別教の一乘なりとしてこれを尊ぶ。嗚呼是れ何の意ぞ。禪宗の無經說は、全く佛教經典の何たるを辨へず、只佛陀設化の一局部たる觀念に屬する通教の空理を偏崇するのみ。放言漫語徒らに非難の言を吐くも未だ佛教の眞意を味解せざるの致す所なり。以上の諸宗は、孰れも佛教經典を觀るの眼識を具へざる者と謂ふも過言にあらず、天台の四教判は、獨り諸宗に勝れ頗る適當な

る判釋なれども、尙ほ未だ究竟せりと稱するを得ず。开は學說としては見るべきものあるも、宗教としては尙ほ幾多の缺點あればなり。(その缺點は已に第一章に述べたり)殊に彼宗の現狀は如何、本尊は如何、行法は如何、彼れは阿彌陀宗なりや、觀音宗なりや、將た觀念宗なりや、彼れは朦朧散漫の弊に斃れたるものにあらずや

斯くの如く佛教各宗現行の判釋は、一として周備し究竟せるものあるを見ず。茲に於て日蓮上人を待つて最後の審判を求め、佛教統一の釋義を明かにすべきを知らん

由來佛教經典とは何物を詮顯するやと云ふに、玄義八には經の五義を述ぶ。曰く法本、微發、(又は顯示涌泉、繩墨、結體之れなり。この五義に各三義ありて三五十五義あり。その三義とは、教本、行本、義本なり。要するに佛教經典は、教行義を詮顯するものなり。この經典何ぞ統一なからんや。即ち妙法蓮華經は此の要義の統一を敎ゆるものにして、日蓮上人はこの妙法蓮華經の本旨を發揮せるに外ならず

教とは、教訓にして、開權顯遠一代一經の妙說を示し

行とは、行法にして、五乘開會、兩善一貫、信智統一の妙行なり

義とは、別つて、三、一に法界觀は、一念三千佛界緣起の妙觀なり

二に人身觀は、一念三千悉是吾子の妙說なり

三に佛陀觀は開迹顯本統一の本佛なり

此の五大要義の統一にして明かならば、一代佛教を通じて統一的の大宗教たるを會得すること難からず

今佛教經典を差別面より見たる上人の妙判二三を擧ぐれば、國家論(錄一〇四)上野抄(錄一〇五)上野尼抄(錄一〇九)等あり。又絕待面より見たるものは、本尊抄に、十方三世の諸佛の微塵の經々は悉く壽量品の序なりとするもの、又因果抄(錄一二五)に、爾前即法華、一切外道の經書皆法華經なりとするもの、即ち統一面の聖文なり

要するに法華經は實に一代聖教の大綱にして、諸經は即ち網目なり。(本尊得意抄參照)故に云く、「皮膚毛彩出でて衆典に在り」「若破若立法華の意」と。佛教經典の生殺與奪の大權を握るものは、實に法華經是なりとするにあり

第二　經典の信仰に就いて

經典の信仰に就いて徹論せば

一、教訓として奉する者　佛陀の滅後小乘の行人は、經典を只教訓として之れを奉じ、經典に依りて知見を開き三學を研けり

二、教法法身の思想を有する者　　佛陀は滅し給へども、その教法は常住不滅なり、佛陀滅し給へば佛身は舍利と變じ又は木畫の二像と成る。これ權身の舍利なり。その說法は經卷となり、教法は不滅の眞理なれば即ち法身として存在す。故に佛陀を見奉らんと欲せば、宜しく法身の經典を崇拜すべしといふに在り。この思想彌蔓して、或は經典の讀誦を勵み、或は金泥を以て經卷を書寫し、生身の佛陀に對するが如くこれを敬禮し、或は六十六部の納經となり、又五種の修行を以て佛教總計の行法なりと思考するに至れり。要するにこの思想は、佛陀の實在を認めざる大缺點を有す。畢竟之れ傍系の信仰なり。かくてこの思想一轉進して、經典中の一文一句を撰出し、眞言的信仰を生ずに至る

三、眞言としての思想を有する者　　眞言とは總持の義なり。佛教經典の教行義は總て眞言中に包含せらる。佛陀も眞理も皆この中に在り。大日も釋迦も阿字の中より生じ來れり。されば曩謨三曼陀と唱へ、神呪の思想となり、萬卷陀羅尼を讀誦し、之れを佛教なりと思料す。されど之れ決して佛教の正系にはあらず、全く外道より傳はれる思想なり

然らば以上の思想を別にして、經典に對しては如何なる思想を必要とするか。曰く

經典は教行義の本なり、故に經典を教行義を詮顯する本としての信仰は正しきなり、進んで佛陀三輪の妙化として經典を尊び、佛陀を離れては更らに經典なしといふに歸着す。これ三輪の妙化としての最後の信仰なり。佛教徒の信仰の正系全くこゝに在り

今經典の意義を廣義に說かば、六塵爲經として色聲香味觸法の六塵を以て經と爲す。而かも娑婆世界は鼻舌身の三根鈍にして、眼耳意(就中耳根最利)の三根利なるが故に、純理的說明としては六塵爲經を說くも、實際此の世界の機類に對しては聲色法の三塵を以て經と爲し給へり。その聲經とは佛在世に於ける聲音詮辯を云ひ、色經とは滅後に於ける紙墨傳持の經卷なり。法經は思惟法と合するもの、所謂眞理そのものを指して經とするなり(玄義八の十二丁以下參照)

小乘三藏の學者は謂へらく、紙墨傳持の色經は教行義を詮出する能詮の教なるも、理は文字を絕するが故に、理之れ正經なり。文字は正經に非らずと。之れに反し圓教者流は、文字即實相なりとして、一塵一法皆中道に非らざる無しと主張す、之れ法經を論ずるものなり。要するに色經は、教行義の三義を結束して示されたるものと見るべし。日蓮上人の主張は能詮の法華經を教行義の法本とし、妙法の題目は所詮の

實歸にして三輪妙化の結晶なりとするに在り。之れ初め經典崇拜より入りてうの極に達し、妙法は經典にあらず、一部の意なり實体なりと見て、遂に三輪妙化の結晶と信ずるなり

茲に注意を要することは、上人の主張を研究せんとせば、淨土、眞言、天台の教義と比較して、その影響點と獨創點とを明らめ、以て上人の特長を發見すべきこと之れなり。以下正しく法華經と上人の妙判とに依りて經典觀を述べん

（一）教法的信仰

教法の信仰に約する法華經の文證を擧ぐれば、陀羅尼品（錄二〇四）には八百萬億那由陀恒河沙等の諸佛を供養するよりも、是の法華經の乃至一四句偈を受持し乃至如說修行せんは、うの功德甚だ多しと說き、藥王品（錄同）には、三千世界の七寶を佛陀等に供養する功德よりは、是の經の乃至一四句偈を受持する方、其福最も多しと說き、又結經（同上）には、佛の三種の身は方等（大乘經）より生ずと說けり。又妙判には千日尼抄（錄二一〇）に佛は子なり、法華經は父母なり。法華經に供養する功德は十方の佛菩薩を供養する功德に同じと述べ、本尊問答抄（錄三五）には、法は能生、佛は所生と說き、法重抄（錄二一〇）には、法華經は重く、佛は輕しと示さる。かゝる類文多々あり、これ等妙經及び妙判に諸佛といひ佛といへるは、言總意別なるを忘るべからず。此の場合に於て壽量の本佛は之れに關らざるなり。即ちこれ決して本佛と妙法との關係を說けるにはあらず。何となれば、本佛の口輪は妙經となり、無數億の衆生を教化し給ふ。この無數億の衆生は、即ち妙經を父母として諸佛と成るなり。故に妙法の子たる諸佛は、迹佛なること明かなり。されば上人はこの意義を鮮明に示し給ふ

此の妙法蓮華經の五字は、萬法能生の父母なり（乃至）四聖は滅歸する佛菩薩羅漢なり（日向記、錄二一二）と、

是れに由て之れを觀れば、妙法の子たる四聖は、滅歸する四聖にして即ち迹佛なり本佛豈に滅歸せんや、深く之れを思へ

衣かたびらは一なれども法華經にまいらせ給ひぬれば、法華經の文字は六萬九千三百八十四文字一字は一佛なり、此佛は再生敗種を心腑とし顯本遠壽を其壽とし、常住佛性を咽喉とし一乘妙行を眼目とせる佛なり。應化非眞佛と申して三十二相八十種好の佛よりも、法華經の文字こそ眞の佛にてわたらせ給ひ候へ。佛を信せし人は佛にならざる人もあり、佛滅後に法華經を信ずる人は無一不成佛如來の金言なり（御衣單衣抄、遺一、三一七）と、

この聖判一往之れを見れば、佛陀は輕く妙經は重し、されど速斷すること勿れ、文に應化非眞佛と書して、本佛に關はざるを示せり。應化非眞佛とは、金光明經に出てたる四身の文（法華經講義六卷十六頁已下參照）にして、眞身應身を別離したる隔歷の見なり。而して應身、化身は共に眞身に非らずと見て、之れを應化非眞佛と云ふ。この眞に非らざる佛に對してこそ妙經の超勝を示すも、若しこの妙經を賜與し給ふ三身即一無始常住の本佛に對比せば、妙經豈に獨り尊重ならんや。學者この書の應化非眞佛の文及び前文の減歸する四種也の聖語に留意して、言總意別の議量を邊する勿れ

凡そ妙法の五字を以て諸佛の父母なりとせば、この妙法の五字は抑も何物ぞや。他なし此れ文字なり。已に文字なりとせば、これ眞言の阿字と等しかるべし。偏狹なる學者は多く斯の眞言的妙法を尊重し、この宇宙は妙法五字の光明に照されつゝありと局解せり。依て今妙法の經力とは如何なるものなるかを說明して、聊かその迷謬を解かん

抑も妙法の經力に就ては、之を實相の理と見る眞如力と、文字としての眞言力と、三輪の妙化としての如來力との三面あり。眞如力とは自然力なり。火の燒く力、水の洗ふ力等之れなり。即ち之れ迹門の談なり。眞言力とは神秘的の談なり。夫れ妙法の力は神秘にして得て思議すべからず、故に稱して妙といふ。上人は斯の如き神秘の說明を用ゐられたるも、之れ說明の正系にはあらず。如來力とは、慈悲力をいふ。天台は一面眞如說を主張するも、經力としては、尙ほ如來の二智を採れり。玄義八に曰く

用は是れ如來の妙能にして、此の經の勝用なり。如來は權實二智を以て妙能と爲し、此の經は斷疑生信を以て勝用と爲す。只二智能く斷疑生信せしめ、斷疑生信するとは二智に由る。人に約し法に約するは、左右互に論ずるのみ、と

天台は如來二智の妙能を以て此の經の勝用となして、斯くの如くに法佛不離を會せり。又上人は壽量の眞意に據りて、如來の二智を捲きて慈悲の中に攝し、如來慈悲の妙能を以て此の經の勝用とし、即ち本佛を母とし妙法を乳に譬へ給ひぬ。尙ほ佛力と經力との關係は後に至りて詳論すべし

藥王品（縁三五四）の如き、喜見菩薩が現一切色身三昧を得たるは、法華經を聞くことを得たる力にして、この經力は如來の妙能なれば、即ち淨明德佛と法華經とに供養し奉ると、說けり。其の他聖語錄教法篇、本尊篇に擧ぐる所を見れば、思ひ半に過ぐるものあらん

（二）總持的信仰

法華の經旨は總持の思想を正系となさず、經に受持法華名者福不可量とあるも、是れ法華の名號の尊き所以を說けるものにして、斯の如き經典崇拜の思想が、眞言的の思想に混用せられしに外ならず、天台が一塵一法皆法界を具すと論ずる場合に於ては、眞言の思想は悉く妙法の文字 音聲中に包含せらると見るは不可なけれども、之れ尙ほ傍系にして、決して法華の正系にあらず、上人が開目抄(錄二、二五)に、南天鐵塔中の法華經肝心の眞言を援引して、眞言思想と法華思想との關係を解釋せられたるは、彼れ等が誇とする眞言が、この妙法の中に包含せられあるとを示されたる眞言徒誘引の說なり、この引文は却て法華の經意は眞言を以て正系となさゞる反證にあらずや、されば聖判に曰く

羅什所譯の法華經には、是を宗となさず、不空三藏の法華の儀軌には印眞言之れあり(眞言見聞錄六八七)

二乘作佛の事をば物ともせずして印眞言の事に依る時は、謂勝見の外道なり、と(仝上)

これ等の指數に依れば、眞言的主張が宗義の正系にあらざると、火を睹るよりも明かならん

傳敎は秀句(錄二、二六)に、妙法の眞言は他經に說かず、阿字の如き眞言は自然的なり因分なれば、珍重するに足らず、妙法の眞言は、最上果分の佛果を通して顯はれ來れる「釋尊の持言」なり、「果分の眞言」なりと說けり、是れ眞言思想を統攝せんとするものにして、因分の眞言を斥けて果分の眞言を說く所、正しく三輪の妙化としての妙法を指して眞言と云ふに過ぎず、阿字的眞言、因分理的眞言の說と天地遙かに異なるを見るべし

日女抄(錄三、二五)に「妙法五字の光明に照されて、本有の尊形となる」とあるを見て、遠陬して妙法を佛果より離れたる因分の眞言として解するは、大なる謬見なり、この文の如きも眞言宗に影響せる一面の義門なるのみ、何となれば同抄の次下を通覽せば、之れに反する多くの義門を列擧し給へり、曰く尊形の佛を出す、曰く功德聚、曰く、此の本尊、餘所に求むると勿れ等と說き、又客体の本尊として、この中に入るべしと示さるゝにあらずや

要するに妙法を因分の眞言的に解するは、(一)妙法は釋尊の持言、即ち果分の眞言なるとを忘れ、(二)經釋の正系を逸する者なり、夫れ法華經は、迹門には開權顯實して實相を說き、本門には開迹顯本して本佛を顯はす、されば印眞言の如きは、全く法華の規模にあらず、故に上人は、法華經には印眞言を規模とせずと喝破し、又印眞言を貴

ふを劣謂勝見の外道なりと叱斥し、又この法華經に依り成佛せば何の不足かあらん、成佛の上に陞の佛、中風の覺者あるべからずと說いて、眞言宗を破し給へり。以て眞言思想は、法華經正系の敎義にあらざるとを知るに足らん。尙ほ眞言的妙法觀は、(三)壽量品の眞意、即ち三輪の妙化を知らず、信行の妙致を遂するより來れる僻見なり。學者須らく猛省せよ

(三)觀念攝得の信仰

經典の上より見れば、安樂行品には、止觀の行を說き、分別品には深信觀成ありて、信智の行法を示せり。而して經典の深意を發揮して、觀念を信仰に攝得するの妙旨を鮮明し給へるは、實に上人の活釋なりとす。即ち觀心本尊抄を見れば、初めに「止觀に云く」と標し、次に「私に會通を加へば」と釋して、「釋尊の因行果德の二法は、妙法蓮華經の五字に具足す。我等此の五字を受持すれば、自然に彼の因果の功德を讓り與へ給ふ」（二四二）と示せり。之れ觀念の思想を受持信仰の內に攝得したる論式なり。（錄二三〇ノ一、二、三、參全し）。此の類の妙判多くして古來觀念と信仰の關係に惑ふもの少なからず、即ち優陀那院の如きは、本尊を以て觀念の手本とし或は本尊を論ずるに方り、觀念の思想を以て十界互具と云ひ、觀念を信仰に攝得せずして、却て觀念に墮

落せんとす。之れ全く(一)信智混亂の弊なり(二)事觀は佛陀に對する渴仰即ち佛陀觀なるとを知らず又(三)信智兩系、統一の大信行たるの妙義を知らざるが爲めなり

(四)三輪の妙化としての信仰(敎行義の本としての信仰)

經典の信仰に就いての結歸として、法華經を敎行義の法本とし、題目を本佛三輪の妙化としての信仰を談らんとす

三輪とは、佛陀の意輪、身輪、口輪なり。意輪は佛陀の慈悲にして、之れに隨自隨他の二面あり。隨自の慈悲とは、絕待跨節の得益を與へんとするもの、即ち吾人を成佛せしめんとし給ふ佛意なり。隨他の慈悲とは、相待當分の得益を指すものにして、即ち餓鬼は餓鬼として、人間は人間として、各々その狀態の上に於ける煩惱苦痛を救はせ給ふ慈悲なり。佛地論には、三種の慈悲を明かせり。一には有情緣の慈悲、即ち父子の關係の如き直接の慈悲なり。二には法緣の慈悲、法の實相より見たる根底の慈悲なり。三には無情緣の慈悲、隨時隨處に有る間接の慈悲なり

斯の如き佛陀意輪の慈悲は、常恒不斷に活動して未だ曾て暫くも止息せず。故に此慈悲は發現して慈善根となり、茲に身輪の應現となり、口輪の說法となる。身口の二輪は畢竟慈悲の作用中に在り。この慈善根は顯かて功德となり、功德は力となる。之

れ如來の神力なり。而してこの慈悲は、單なる慈悲にあらず、佛陀は大智惠まします故に智悲一体の慈悲なり。又佛智は單なる智惠にあらず、眞理と冥合して、眞理を照し、領有し支配し給ふ。されば理智悲一体の慈悲なり。要するに佛陀は實に慈悲の結晶体なりと謂ふべし

身輪は佛身なり。之れに如意珠身、藥王樹身の二身あり。如意珠身とは、如意寶珠の萬寶を包むが如く、佛の一身に一切身を表はす德を具へ給へる內面包有の德を云ふ。即ち統一的佛身なり。藥王樹身とは、藥王樹が閻浮提の一切草木の根本なるが如く、佛陀の三世十方に分身散影し給ふ所の外面應現の德を云ふ。即ち多身的佛身なり

口輪は佛陀の說法なり。これに天鼓、毒鼓の二說あり。天鼓とは天人が鼓を擊つが如く、佛陀が柔輭の御聲を以て、顚正的に衆生を敎化し給ふ微妙の說法を云ふ。毒鼓とは、毒を塗れる鼓の音を聞くもの悉く死するが如く、佛陀が破邪的に二乘惡人女人等を呵責して、その惑を斷滅し給ふ麁語の說法なり

佛陀三輪の妙化は、常住不斷に活動して衆生を濟度し給ふ。自我偈の文に常說法敎化と說けるは、佛陀の口輪なり。常在此不滅と說けるは身輪なり。每自作是念と說けるは意輪なり。總じて壽量品は、全品を通じて如來三輪の妙化を說き示せるに外ならず

今壽量品の大意を示せば、本佛の妙体妙用は、如來秘密神通之力の文之れなり。日蓮上人は、この大如來を以て、本佛の妙体なりと敎へ給ふ。法華經は實にこの眞實の大如來を紹介せんが爲めに起れり。而してこの本佛の妙用は、實に無始久遠より活動を存續せるなり。經文には、阿僧祇劫と說きて、又時間上の中心を今日の出現に取るが故に茲に、生身即法身、始覺即本覺の說起る。之れ如來妙用の時なり。次に如來妙用の處は、阿僧祇國と說きて、又娑婆世界を中心として盡十方に應現散影し給ふ。されば、この壽量の大如來は、時間と空間とを超越し給へる本佛にして、而かも今此處に現せり。是れ實に大哲理を示せる佛陀にておはすなり。この本佛の妙用は即ち三輪の妙化にして、經に我以佛眼觀其信等諸根利鈍隨所應度と說き、又は如來見諸衆生樂於小法德薄垢重者と說けるは、本佛意輪の慈悲を示せるなり。この大慈悲發動して身口の兩輪となり、形聲の二益を施し給ふ。名字不同年紀大小の文、又は或示己身、他身己事他事の文は、身輪の形益なり。說微妙法、或說己他身、己他事の文は、口輪の聲益なり。發歡喜心とは得益の文なり。斯くの如く本佛三輪不思議の大化は三世に亘りて利益を垂れ給ふ。この法說終りて、良醫治子の譬說あり。就中是好良藥の文意を

云はゞ、諸の經方とは、即ち十二部教、藥草とは、教中所詮の八萬の法門なり。この能詮の教と、所詮の法を、擣篩和合して色香美味皆悉具足せる良藥とし給へり。之れ教法に對する結要にして、教化の最上甘露門なり。換言せば、是好良藥は一切經の醇粹精要を結晶したるものなり。されば上人は、是好良藥の南無妙法蓮華經は、一切經中の肝要、廣略要の中には要が中の要なりと教へられたり

神力品の四句の要法は悉く如來の一切と說き、傳教大師之れを果分の一切と釋せらる。これ本佛三輪の妙化を示せる文なり。この他法華全典に亘りて三輪の妙化を說ける文多々あり。意輪に就いては、方便品の「而起大悲心」、譬喩品の「能爲救護」の文、信解品の長者窮子の譬、藥草喩品の大雲の譬之れなり。又身輪の文は寶塔品の「若有能持則持佛身」法師品の「此中已有如來全身」分別品の「斯人則爲頂戴如來」(這は經典を以て佛陀に替へて見たる思想なり)、神力品の「能持是經者則爲已見我」の文等なり。口輪には、法師品の三說超過、藥王品の十喩校量の如き、法華經を經典王として見たるものの之れなり

妙判に就いて云はゞ、開目抄には、主師親の三德を標し、次んで「一切經の中にこの壽量品をしまさずば」、或は「涌出壽量の二品を除いては」として佛陀觀を說き、「壽量品を知らざる諸宗の者畜生に同じ」と、佛陀中心の斷論を下して、眞の佛陀を紹介せずば佛教何の詮かあらんとの意を示され、又本尊抄には「釋尊の因行果德の二法は妙法蓮華經の五字に具足す」と述べて釋尊の功德に約し、「佛大慈悲を起し」として妙法は佛陀の意輪より起るを示し、法蓮抄(錄二四六)には「母の食物の乳となりて、赤子を養ふが如し」と說きて、本佛を母に例へ、妙法を乳として、法佛不離の關係を示し給ひぬ。如斯三輪の關係を示されたる類文枚擧に遑あらず。又意輪に約しては、二像開眼抄、新藤抄(錄三六〇)には、法華の文字を佛の御魂とし、身輪の文としては、曾谷抄(錄二四五)には「此の經の文字は、皆悉く生身妙覺の御佛也」四條抄(錄三六七)には「法華經の文字を拜見せさせ給はゞ、生身の釋迦如來に値ひ進らせたると思食す可し」と示され口輪の文は、高橋抄(這一、二七九)の結要參付屬の文二像開眼抄(錄三六一)の法華經は佛の梵音聲の第一なるとを說ける文等之れなり

されば吾人は、南無妙法蓮華經の文字を拜し奉る時、その聲音を耳にする時、其處に直ちに本佛の實在を聯想し來りて、妙法は全く本佛三輪の結晶なるとを覺り聲々念々本佛三輪の妙化を渴仰して活ける信仰を受持すべし。これ經典信仰に就いての歸趣なり

第四章　佛教行法の歸趣

佛教行法の歸趣は、先づ世間、出世間、二面の行法を統一するを要す。即ち只或は經典を讀誦し、或は觀念を凝らすが如き局部の行法のみに偏傾せず、能く人道をも守りて世出兩善一貫の行法を取らざるべからず。又出世間の行門上には、能く觀念、信仰の二行を統一せる大信仰を會得するを要す

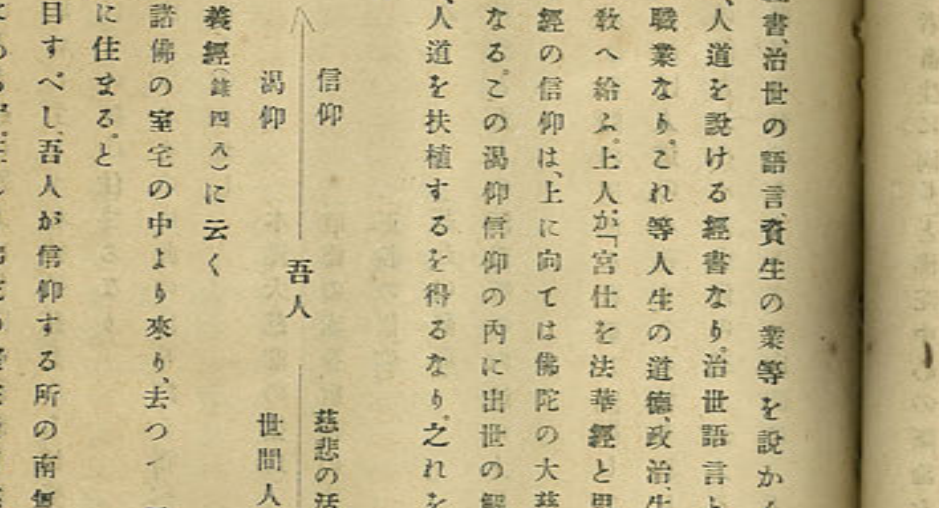
七佛通戒偈は、出世兩善を統一する適切なる教訓なり。曰く

諸惡莫作　衆善奉行　自淨其意　是諸佛教。と、

この四句の意を示せば、諸惡作す莫れとは、消極的なり、靜止的なり。衆善は奉行せよとは積極的なり、活動的なり。自から其の意を淨くすとは、形式的に流れずして精神的の信仰を教ゆる者。是れ諸佛の教なりとは、即ち佛教の、根本義なるを示せるなり。而して諸惡を世出二面に別てば、非人道は世間の惡にして誘法は出世の惡なり衆善としては、世間には人道を奉行し、出世には正法を受持すべきなり由來佛教の見解には世出の關係未熟の弊あるも、獨り法華經は能く之れを調整して、世出一貫の思想を發揮せり。法華の俗諦開會の妙談は即ち之れなり。經（法師功德品、錄五〇二）に曰く

若し俗間の經書、治世の語言、資生の業等を說かんも、皆正法に順せん。と

俗間の經書とは、人道を說ける經書なり。治世語言とは善良なる政治なり。資生業とは、生活を資くる職業なり。これ等人生の道德、政治、生活問題をてが、直ちに出世の正法と順應するを敎へ給ふ。上人が「宮仕を法華經と思召せ」と訓へられたるもこの意に外ならず。法華經の信仰は、上に向ては佛陀の大慈悲を渴仰して無限の信仰となり光となり力となる。この渴仰信仰の內に出世の解脫を得、下は社會に對して慈悲の活動となりて、人道を扶植するを得るなり。之れを世出兩善一貫の妙行と稱す、今示せば次の如し



法華の序分、無量義經（錄四八）に云く

是の經は、本と諸佛の室宅の中より來り、去つて一切衆生の發菩提心に至り、諸の菩薩所行の處に住まる。と

この來至住に注目すべし。吾人が信仰する所の南無妙法蓮華經は決して眞言的陀羅尼等より來るにあらず。正しく佛陀の室宅たる慈悲心の輪界より來るなり。か

くて吾人の信仰に入り、茲に吾人は佛陀の慈悲を感受して、上に向つては菩提を求むると同時に、下社會に對して相待的慈悲即ち博愛化他の菩薩行となり、人生社會の光となる。そこにこの經は住するなり

佛陀は、又四法を成就するものは、此の法華經を得べしと說き給へり（勸發品、錄三六九）その四法とは、即ち次の如し

（一）護念　（本佛大慈悲の攝理）
（二）德本　（道德の素養、宿善の力）
（三）正定聚　（正義の信仰）
（四）發救衆生心　（慈悲の發動）

斯の如く佛陀の慈悲と、吾人の活動等の四法の上に於て、信仰の存するを見よ（前段の圖解參照）

法華經の意は、人道は世間の道德を啓發し開顯して、之れに生命と根底とを賦與し又實行力を添ゆ。されば人道の小善も、この法華經に接合して即ち大善となるなり。之れを俗諦開會の說と云ひ、小善成佛の義と云ふ。これ出世一貫の思想にして、上人の發揮し給へる特長の敎義なりとす。日向記に（二五丁）云く

法華經の意は、一華一香の小善も法華經に歸すれば大善となる。と

斯く一華一香の微も尙ほ成佛の力ありとするは、全く相待的小善が絕待的の妙行に會合するに因るなり。例せば赤穗義士が薪割となれるが如き、その業務賤しきが如くなるも、これ義士が忠誠の思想の發動なれば、千歲の下人心を感孚せしむる力あるにあらずや。吾人は本佛の大慈悲を渴仰し、この大慈悲を感受して一分たりとも相待善を社會に寄與せんとす。是れ即ち世出一貫の妙行にして、この滾滾たる吾人の信仰は正しく社會の道德を扶植するの力なり光なり

次に出世間の行法の上に觀念系と信仰系との兩系あるとを云はゞ、小乘敎の始めより利根なるものは觀念より進み（界方便）、鈍根なるものは信仰より入れり（念佛停心）之れを各宗に配して云はゞ、俱舍、成實の二宗は、何れも觀念の上には空理を尊重し、信念の上には應身佛を信賴す。三論宗は、觀念の上には八不中道の理を尊崇し、信念の上には眞應二身の佛身を緣ず。法相宗は觀念の上には唯識觀を尊崇し、信念の上には三身の佛陀を緣ず。華嚴宗は、觀念の上には唯心法界觀を立て、信念の上には盧舍那佛を取る。眞言宗は、觀念の上には六大無碍を立て、信念の上には毘盧舍那佛を取れり。禪宗は、觀念に偏傾して通敎体空の見を立て、信念は混沌たるも劣應身佛

に拜跪す。淨土宗眞宗は、純信仰系にして只信念の一面のみを取りて阿彌陀佛を偏し、絶待に觀念を非認して雜行と貶せり。而して天台宗は、觀念の統一を理想として一念三千觀を立て、信念の上には雜多の對象を許したるも、彼れの本旨は久遠實成三身即一の佛陀を取るにありき

日蓮上人は、この天台の一念三千觀を一轉進して信行に攝取し又久遠實成の本佛を絶待的に發揮してこゝに信行の中堅を定め、かくて觀念系の總べてと、信行系の總べてとを悉く統一し來りて、法行(事觀)信行(信念)統一の妙信を敎へ給ひぬ。即ち本尊抄には、止觀云々と標して觀念を結束し、終に妙法受持の信行に攝得せられ、開目抄には、主師親を標榜して佛陀觀を說き、觀念の終極は實に佛陀の慈悲を渴仰するに在りとし、之れ單なる信仰にあらずして大智惠なりと論斷せられたり。されば之れを本尊の上に顯はしては、統一的大本尊となり、之れを行法上に敎へては、有知無知一同に統一的の大信仰に入らしめ、之れを折伏弘敎の上に應用しては、諸宗無得道の鐵案となり、之れを譬說しては、この法門一たび顯はるれば正法像法に論師人師の立て初めし法門は日出でゝ後の星の光、巧匠の後に拙きを知るなるべしと宣し給ひぬ。その構成的宗敎として周備せる敎義を有することは、誠に敎嘉の外なしと思ふ

第五章　佛敎敎理の歸趣

佛敎敎理の主たるものは、法界觀、人身觀及び佛陀觀なり。この三つの敎理は、各正明に會得するを要す

(一)法界觀

法界觀は、佛界緣起統一の妙觀として認むるを要す。即ちこの法界を眞如の如き談理的に見ずして佛陀の光に包まれたる道德的規律の上に存すと見るべきなり。佛敎に或は空と云ひ五大と說き互に長短を爭ふも、畢竟之れ五十步百步の見にしてこれ等を大成せるものは即ち天台の一念三千觀なりとす。一念三千は十界互具より始まり、この法界を迷悟の二に別ち、迷の九界と悟の佛界と互具融即するといふに在り。而かも天台は、法界の原始を法性の一理とし非迷非悟の体を立て、無明の迷より九界の事法を生じ、九界の衆生理に順じ行を修して果を證し、こゝに佛界ありとなす。これ即ち無明緣起論なり。之れに反して日蓮上人は、佛界緣起論にして、即ち天地法界は佛陀圓慈の光明中に包容せられて吾人は常にその慈光に照らされつゝあり、而るに吾人は盲觀にして見る所なし、されば吾人は眞理を欲求するのみにし

ては未だ安んずるを得ず、進んでその光を欲求すべきなり。これ法界觀の極致なり。されば吾人が佛陀を認識してその大慈悲を渴仰する信仰は優に天台の惠行に勝る。之れ上人の正觀にして、分別品の深信解相は正しくこの法界觀の妙致を敎ゆるものなり

深心に信解せば、即ちこれ佛常に耆闍崛山に在ましして、大菩薩諸の聲聞衆の圍繞せると共に說法するを見、又此の娑婆世界は其の地瑠璃にして坦然平正に、閻浮檀金これを以て八道を界ひ、寶樹行列し諸臺樓觀皆悉く寶をもつて成し、其の菩薩衆咸く其の中に處せるを見ん、若し能く是の如く觀ずるとあらん者は、當に知るべし、是を深信解の相となす（分別品、三〇五）

この聖敎尤も正明に神會せよ

（二）人身觀

吾人はこの人生に向て如何なる覺悟を有すべきか、生何處より來れる、死して何處にか去るべき、この疑問を解決せんとして茲に宗敎の欲求起る。されば佛敎は實に小乘の始めよりこの人生問題に對して解答を與へたるなり。彼の外道等は思へり。人間は神に依りて造られたりと。而して佛敎は全く之れを非認して迷悟の因果を說き、小乘には生滅の四諦、通敎には不生の四諦、別敎には無量の四諦、圓敎には無作の四諦を敎ゆ。この四種の四諦は原因結果の理を一時的若しくは差別的に說くと、之れを實在的互具的に說くとの相違にして、その原理に於ては差別なし

小乘敎に於て業力に依りて苦樂の果を招感すと說くは、業感緣起說なり。而して進んでうの惑業の本体を說明せんとするは、賴耶緣起なり。賴耶は含藏と譯す、宇宙全体を包含する大識をいふ。即ち吾人の小我を破してこの大我に一致せざるべからずとす、尙ほ進んでこの大識の奧底には事（現象）理（眞理）不二の全体、色心未分の全体あり、开は非迷非悟非心非物、言語道斷猶ほ虛空の如きものなりと說くは眞如緣起論なり。又萬有の相即相入、六大所成を說き現象實在を主張するは、華嚴の事々無碍法界說、眞言の六大常住說にして、これ法界緣起論なり。約言せば、業感緣起は因果なり、賴耶緣起は心なり、眞如緣起は理なり、法界緣起は事なり

天台は以上の思想を收束したる眞如緣起說にして、こゝに無明緣起の敎義を唱へ日蓮上人は大發展を試み以て佛界緣起說を光顯し給ふ。金剛錍に云く

實相（理）は必らず諸法（事）、諸法は必らず十如（因果）、十如は必らず十界（迷悟、事）、十界は必らず身土（依正）と（錄二六九）

見よ、一念三千論は如斯事理、因果、迷悟、依正の關係を說くものなるを、即ち一念三千とは實相の理と十界の當体(即ち本体)と業(即ち因果)との關係を出てざるなり、而してこの一念三千に三種の區別あり

(一)性具說　　心性に十界を具すといふもの

(二)事具說　　六根互融とて色体の互具を說くもの、六大事成、事々無碍法界、當体蓮華、松竹櫻當位即妙、我身は本覺三身の如來なり等と云ふもの、皆この類なり

以上の二說は、要するに天台に敎ゆる所の理体の三千、事造の三千にして、上人が一念三千其の理を盡くすと許し、理具の法門散々に責めて候といへる、去暦昨食の理談たるなり、而して上人の敎へられたるものは、決して如斯理談にあらずして、實に一轉進せる妙說なり、今假りにその義に依りて命名せば

(三)功德化の互具　　と謂ふべし、彼の色体の互具は、釋尊の當体は我等が骨肉なりといふも、之れ只理談にして圓敎の通說のみ、通敎すら尙ほ相即圓敎を說き、華嚴眞言又皆之れを唱道す、加之小乘にまれ哲學にまれ皆萬有相關を說くが故に、草木成佛の如き汎神的思想は毫も珍重するに足らず、而して獨り吾人の尊重すべきものは、この功德化の互具あるのみ、這は生佛の關係に於て上に佛陀の功德あり、下に罪惡の衆生ありて、能くその罪を滅し必らずその功德を受得するを云ふ、隨喜品の文句に深理廣事と說ける之れなり、佛陀の功德たる廣事を渴仰せば、其處に深理たる眞如の事理は包含せらる、故に之れを廣事の三千といふなり、上人は十八圓滿抄(建三〇六)に、之れを毎自作是念の三千と說かれ、受師は慈悲の三千、達師は功德の三千と稱せられたり、之れ一念三千悉是吾子の妙說なり、之れ實に功德の授受なり、吾人は決して曠野に彷徨せる貧窮孤露の窮子にあらずして、恒に佛陀の大慈悲に哺育せられつゝある長者子なれば、倉庫に充溢せる無量の珍寶は求めずして自から得らるゝなり、佛陀毎自の慈悲は上より來り、下には吾人渴仰の信念ありて、この慈悲とこの信念との接觸する所、其處に功德の三千互具す、壽量品の是好良藥は即ち佛陀の功德にして、この大功德を傳達し賜與する方法として、耳根得道の吾人娑婆の衆生に對して、南無妙法蓮華經の文字語言を授與せらる、されば本尊抄には「釋尊の因行果德の二法は、妙法蓮華經の五字に具足す、我等此の五字を受持すれば、自然に彼の因果の功德を譲り與へ給ふ、四大聲聞の領解に曰く、無量の珍寶求めざるに自ら得たり」と示されたり、吾人は法華經の信仰に依りて斯の如き大功德を受得するが故に、茲に大慰安を得て幸福の生活に入るなり

苦をば苦とさとり、樂をば樂とひらき、苦樂ともに思合せて南無妙法蓮華經と打唱へ（四條抄、錄四五九）

法華經を信ずる人は冬の如し、冬は必ず春となる（妙一尼抄、錄四五九）

春の野に花の開けるが如し、と（月滿書、錄二九二）

斯の如く信仰の力は人生總ての上に於て常に幸福を謳歌するに至る。日蓮上人が晩年身延に隱栖し給へる時の記述を見れば、實に景慕に堪へざるものあり

誠に身延山の栖は、ちはやぶる神もめぐみをたれ天下りましますらん、心無きしづの男しづの女までも心を留めぬべし。哀を催ほす秋の暮には、草の庵に露深く檐にすだくさゝがにの糸玉を連ぬき、紅葉いつしか色深ふして、たゞ〳〵に傳ふ懸樋の水に影を移つせば、名にしおふ龍田河の水上もかくやと疑はれぬ。また後ろには峨々たる深山そびへて、梢に一乘の果を結び、下枝に鳴く蟬の音滋く、前には湯々たる流水湛へて實相眞如の月浮び、無明深重の闇晴れて法性の空に雲もなし、かゝる砌なれば庵の内には晝は終日一乘妙典の御法を論談し、夜は竟夜要文誦持の聲のみす。傳へ聞く釋尊の住み給ひけん鷲峰を我朝此砌に移し置きぬ。霧立ち嵐はげしき折々も山に入りて薪をこり、露深き草を分けて深谷に下りて芹をつみ、山河の流れもはやき巖瀬に菜をすゝぎ袂しぼれて干しわぶる思ひは、昔し人丸が詠じける、和歌の浦にもしほ垂れつゝ世を渡る海士もかくやとぞ思ひ遣らる（身延記、錄八一〇）

身延に於ける上人の消息は如何。四面山川を以て圍繞し、草木森々として狼音山に滿ち、大石連々として猿聲谷に響く。花は夏に開き菓は冬に成り、鹿鳴哀ふして蟬聲喧ましし。草木茂りて晝尚暗く、霜雪深くして行人絶ゆ。僅かに見るものは樵夫のみ。如斯凄凉極まれる狀景も、上人信念の前には四圍悉く美化し靈化せられてユートピヤとなり無限の滿足を歌はる。是れ實に人生の極致にして、信仰的生活の好模範たるなり。豈欣仰すべからずや

（三）佛陀觀

佛陀觀には、歴史の佛と、權教の說明と、法華の統一的顯本との三面の解釋を見るべし。單に歴史の佛と見るは小乘の見なり。十界の依正即ち森羅三千の現象そのものが佛陀なりとする汎神的思想は、畢竟權教の見のみ。而して法華顯本の佛陀は、始覺（事實）即本覺（本体）なり。その本体たる如意珠身は、絶待身にして、應現の藥王樹身は、相待身なり。この人格的有限の相待身が即絶待の無限身たるなり。彼の龍女の讃佛偈

に「微妙淨法身具相三十二」と歌ひて、具相三十二の相待身そのものが直ちに絶待微妙の淨法身なりと讃美せるは、この意を漏せるにあらずや。而して佛身には第一微妙の色（嚴王品）、色中の上色（結經、共に錄一六二）を具へ給ふ。之れを上人は「柔軟の御姿」（持法華問答抄錄一六八）と宣べ給へり。實に之れ眞善美の具足せる微妙の尊容なれば一たびこの佛陀を拜し奉る者誰か渴仰の念なからん。若し夫れ山川國土の如き、宇宙現象そのものが佛身なりとせば、是れ談理のみ何の渴仰かあらん。佛子解せりや

又近來瀕りに文字の本尊のみを偏崇するの徒あり、是れ未た本尊の實体と表象との關係を思はざるの迷見なり

次に佛陀は、理智悲圓滿にましませども、而かも慈悲爲正なるとを會得しその慈悲は三輪の妙化たるとを知るべし。又その慈悲には隨自、隨他の二面あれば、如來隨自の大慈悲の上に渴仰を捧ぐると同時に、近き人生日常の上に下し給ふ如來隨他の慈悲に對しても活ける信仰を捧ぐべし。活ける信仰は恰かも女人が懷妊するが如く、佛陀は活ける信仰の心の内に妊まれ給ふ

南無妙法蓮華經と心に信じぬれば、心を宿として釋迦佛懷まれ給ふ。始は知らねども漸く月重なれば、心の佛夢に見え、悅こばしき心漸く出來し候べし、と（松野女房抄、錄四一六）

法華經を信ずる心は、即ち活ける佛陀に對する渴仰なれば、聖語に示せる如く吾人の精神の内に活ける佛陀の下り給ふなり

暮行空の雲の色、有明け方の月の光までも、心を催す思なり（持法華問答抄、錄四一八）

夕空の雲の色彩を眺め、有明け方の月の清光を仰くの時、信仰の目に映するその自然美は、そこに實在の佛陀を聯想して、渴仰の泉に新鮮なる靈水を湛へ、歡喜の園に清香の花を開かん

法華經は釋迦牟尼佛なり。法華經を信ぜざる人の前には、釋迦佛入滅を取り、此の經を信ずる者の前には、滅後たりと雖ども佛在世なり（國家論、錄四二〇）

佛の入滅は既に二千餘年を經たり。然りと雖ども法華經を信ずる者の許に佛の音聲を留めて、時々刻々念々に我が死せざる由を聞かしむるなり、と（仝錄四〇四）

斯の如く本佛三輪の妙化は結晶して妙法の文字音聲となり、佛陀の力慈悲の光は吾人を攝護し給ふ。吾人たるもの何ぞ本佛の力と光とに對し又三輪の妙化に對して、滿腔の渴仰を捧げざるを得んや

第六章　統一本尊の顯示

本尊は宗教の生命神髓なり、日蓮上人は實に佛教の精髓を發揮して完全圓滿なる統一的大本尊を顯示し給ふ、今本尊に就いての要義を語らん

(一)佛教本尊式の正系

佛教の本尊は、歸依三寶を以てその正系とす、歸依三寶は佛徒たるの標章にして、三寶の中には佛寶を以て中心とす、小乘の三寶は丈六の釋尊と、阿含經と、迦葉阿難等なり、乃至法華經本門には、本門の教主釋尊と、妙法と、本化の大士とを以て三寶とす

結經に曰く、我れ今大乘經典甚深の妙義に依つて、佛に歸依し法に歸依し、僧に歸依すと(錄三一二)

之れを上人の主義より云はゞ「我れ今本門壽量の妙義に依つて、佛に歸依し、法に歸依し僧に歸依す」となるなり、されば上人は本門段の勸請に「南無開迹顯本法華經中一切常住之三寶」と擧げられ、本尊抄(錄三二七)には之れを說明して本尊の樣式を示し給へり、之れ實に佛教全體の正系に準據して組織せられたる確定的教義なり

然るにこの大本尊を智力的觀心の本尊とし、或は眞言的曼陀羅と見るが如きは皆傍系の說明に外ならず、由來一体三寶の說は、種々誤解を生せり、即ち佛とは絕体の

眞理に合体するもの、法とは眞理そのもの、僧とは法佛合体せる眞理の應用なりとして、理論的に見るものあり、或は阿佛房さながら寶塔なりとの一文を僻解するが如き、已心に約して一体三寶を立つるものあり、已心に約する說を尊ぶものは、觀念系に屬し、理に約する說は天台の亞流なり、又妙法即佛となすものは稍信行に近きも、之れ尙ほ談理的にして法華の信仰の正系にあらず

されば有相信行を立つる上には、正しく別体三寶の說を採りて上人の示教の如く釋迦佛に歸依し、釋迦所說の妙經に歸依し、本化の傳導者に歸依すべし、これ佛教本尊式の正系なり

(二)日蓮立宗の綱領

上人の宗旨が三大秘法なるとは確定せる教義にして、一時の學見にあらず、而して三大秘法は、本門の本尊と、この本尊を信仰するに就いての方式規則たる戒壇と、本尊に對する信仰即ち題目となり、而して授戒作法の樣式は結經(錄三一三)にあり、曰く

唯願くは釋迦牟尼佛正徧智世尊、我が和上と爲り給へ、文殊師利具大悲者、願くは智惠を以て我に淸淨の諸の菩薩の法を授け給へ、彌勒菩薩勝大慈日、我を憐愍す

るが故に、亦我が菩薩の法を受くることを聽し給ふべし。十方の諸佛現じて我が證となり給へ。諸大菩薩各其の名を稱して、是の勝大士衆生を覆護し我等を助護し給へ。と

この文を壽量品の意に照して解せば、この文中文殊等とあるは、上行菩薩と見るべく、即ち戒師和尚は本佛釋尊なり。多寶如來は阿闍梨なり、上行等の四菩薩は敎授なり、三世十方の諸佛は證明なり、文殊以下諸天善神は同伴衆なり。この三師一證一伴ありて本門戒体抄に示せる如く、今身より佛身に至るまで能くこの妙法の戒体を持つや否やと、その作法を行ずる狀態を書き顯はされたるもの、即ち本門の大本尊なりとす、されば授戒作法の上より本尊を會得することは尤も緊要の義門たること明なり

以下本尊に就いて謬見を指摘せん

第一、觀念系の敎義　　觀念系に正しき考察と、誤解に屬する考察との二弊あり、而して誤解者は、大本尊を以て一念三千十界互具の觀境と見るが故に、全く智力的觀念の行を立つるに至る。上人が「一念三千の法門をふりすゝぎたてたる大曼陀羅」と敎へられたるは、觀念上の理論にあらずして、一念三千の煩鎖なる觀念思想を洗

ひ去り、一轉進して信行に攝得することを示せるなり。觀心本尊抄の意亦然り草木成佛抄の文は

一念三千の法門をふりすゝぎたてたる大曼荼羅なり。當世の習ひそこないの學者ゆめにもしらざる法門也（錄三二八）

と示し給ふものにして。上人の立て給へる正觀は、信行と觀念とを統一したる大信行なり。然るに習そこなへる學者は、一念三千とし云へば智力的觀念の理論なりと思へり。又興門は大本尊を指して上人の魂なりとし、優陀那院は己心本尊なりと論ず。何ぞ習そこなひの學者の多きや。蓋し本尊とは、之れを客觀に置きて威應を求むるものなると論なし。主觀的己心本尊を主張するは、信行と合せざること辯せずして明なり

第二、事系の敎義　　妙法の曼陀羅といふが故に、妙法そのものを本尊なりとし、この妙法は五百塵點劫の昔より釋尊の心中に秘させ給ふの文を速斷し、又或は「此の本尊は世尊說き置かせ給ひて後」とある妙判を誤解して、妙法を眞言的に認むるものあり。蓋し妙法の曼陀羅と稱し、心中に秘すと云ひ、說き置かせと云へるは、三寶式に於ける歸依法にして、この妙法は釋尊の說敎釋尊の持言、果分の眞言にして

釋尊の三輪功德化の妙法たるとを知らば、かゝる誤解も遂に霧消すべけんなり

又日女抄に、五字の光明に照されてと示さるゝが故に、法言的の本尊なりと誤解するものあり、這は日女抄の全文を拜讀せば、うの曲見謬解自から氷釋せん

或は本尊問答抄（錄三五〇）の能生所生の說に依りて、妙法は能生の本尊なりと主張するものあり、這は妙法を三寶中の法寶として稱揚せられたるものにして所生の佛の中に本佛をも含める如く解するは甚だしき謬見なり（前段第三章を參照せよ

要するに、眷屬系の思想は法佛の關係を誤りて、本佛を忘れたる偏見に陷いれるもの多きを見る

第三、人本尊の敎義　　人本尊中殊に釋尊に就いて說かんに之れに、正系と誤解との別あり、うの正系とは、法門可申抄に云く

念佛宗は、法華經に背いて淨土の三部經につくゆへに、阿彌陀佛を正として釋迦佛をあなづる、眞言師は大日を詮とをもうゆへに、釋迦如來をあなづる、戒に於ては、大小殊なれども釋尊を本とす、餘佛は證明なるべし、諸宗殊なりとも釋迦を仰ぐべきか、と（錄三二八）

這は佛敎の通則より論ずるものにして、即ち戒法より云へば、決して釋迦佛を捨つべからず、他佛は皆證明なりとは、これ頗る穩健なる思想にして不磨の主張なり、而して吾宗は本門の敎主釋尊を本尊とすべきと、報恩抄等に明確なる指敎あり、然るに本佛釋尊を捨てゝ日蓮上人を以て本尊と仰ぐが如きものあるは、人本尊上の誤謬にして、その愚知るべきのみ、經に云く（錄三三九）

一心に佛を見上らんと欲して自から身命を惜まず、時に我れ及び衆僧俱に靈山に出づ（壽量品）

時に世尊上首の諸の大菩薩を讃歎し給はく、善き哉、善き哉、善男子、汝等能く如來に於て隨喜の心を發せり、と（涌出品）

一心欲見佛の文は、本尊の依文なり、之れ佛陀中心にして、而かもその中に法寶存す

又涌出品に、上行等の菩薩が如來を隨喜し給へると宜しく一考を要す、又結經に「閉目則見、開目則失」と說けるは、佛に對し法に對する思想なり、妙判中、佛陀に約して釋尊を本尊とし、敎法に約して妙法を本尊とせよと示さるゝもの、之れを總括し來らば、即ち歸依三寶に歸着すると明かなり、然るを或は本尊（コレヅウ）の全體を一大圓佛なりといひ、妙法はこの一大圓佛の名號なりといふが如きものあるは、全く三寶式と授戒作法と、信智の關係等とを辨へざる爲め、徒づらに錯謬の見に陷りたるものにして

その愚惘むべき也

第四、教法系の教義　妙法を以て一切經中最上の經典とし、或は三寶式中最上の法寶と見るものあり、是れ正見なり、されどこの思想は眞言系の思想に陷り易し戒めざるべからず、而して教法系の正系は、廣略要が中の要法として見るに在り以上本尊に對する誤解を辨じ了れり、要するに佛陀觀の正系と、教法系の正系を辿り行かば、其處に三寶式と授戒作法に叶ひたる統一的信行の本尊を會得するとを得ん、聖語錄(三五三頁以下)本尊篇第五章(本佛の三輪に約すに掲げたる妙經妙判を參觀せよ、即ち經文としては(五)神力品の文は、法華經に隨喜し釋迦佛を禮拜供養すべしとし(六)藥王品には、淨明德佛と法華經とを供養し上つるべし說き(七)妙音品には、我(釋迦佛)と法華經とに歸依せよと敎ゆ(九)(十)亦然り、妙判としては(十五)聖愚問答抄には、命を釋尊と法華經に奉り、慈悲を一切衆生に與へ」と說き(十六)善無畏抄には、不孝と謗法との科を脫かれんには、釋迦佛を本尊とし法華經を信せよと敎へ(十七)同生同名書には、法華經を日輪、釋尊を月に比例し、相錯綜して女人に對する敎訓を示せり、これ等は皆歸依三寶より來れる穩健の思想にして、即ち佛敎本尊式の正系の主張なりとす

第七章　結論

佛敎の統一的釋義に就いてはその概要を述べ終りたるが、今その要點を列示してこゝに本論を結ばんとす

抑も佛敎は統一的解釋に由らずんば、重要敎義の解決を見る能はず、隨つて佛敎の興立を期するを得ず、その重要敎義とは、佛陀出現の目的、佛敎經典の歸趣、佛敎行門の歸趣、佛敎敎理の歸趣、及び統一本尊の顯示にして、敎理とは法界觀、人身觀、佛陀觀を含めり而して統一的釋義の經典としての根據は法華經にして、その釋書としては天台、日蓮の主張を精研すべく、此の經釋に根據して時代に適當なる應用をなすべし

法華經の統一經たる立證は、無量義經並に法華經に在り、天台の統一的釋義は一念三千論に於て觀念系を統一したるも他に多くの欠點存せりしかば、日蓮上人に至りて完全に之れを補足せらる、されば上人の統一的釋義は實に周足圓滿のものたるなり(以上第一章)

佛陀出現の目的に就いては、二世救濟の要旨、圓慈觀の概要、三輪の妙化を知るを要す、彼の小乘を只空寂の一面のみに見、佛心宗が虛無の一面を見、淨土宗が釋尊の身

手有力を信せざる、斯の如く我國現在の佛教各宗は觀念、信行の二系に就いて各一方に偏して、佛陀出現の目的を正解するに至らず、是れ豈哀むべき狀態ならずや

法華經には、未來成佛の一面を示せる文あるも、同時に二世周足の教訓あり。日蓮上人は、末法爲正の主張にして、二世救濟を唱道し佛陀出現の目的を明示せられたり

（以上第二章）

佛教經典の歸趣に就いては、教相判釋と經典信仰の二面あり。その教相判釋に就いての要義としては、佛教の論爭が差別に馳せて統一を遺し、その差別面も亦正確なる判斷なかりき。即ち小乘の上座、大衆の論爭、別教の差別思想等之れなり。圓教には融通思想なきにあらざるも、未だ法華開顯統一の思想に及ばず。又各宗の判釋は、皆缺點ありて一も見るに足らず。而して日蓮上人は、法華經を以て一代一經統一の妙典とし差別と統一との二面に向つて正確なる指教を示されたり

抑も佛教經典は何を詮顯するやといふに、經には五義あり、五義各三義ありて十五義となる。即ち佛教經典とは、教法、法界、人身、佛陀、行法の諸觀を詮顯するものにして、法華經は實に此の五大要義の統一を明かせり、要するに法華は大綱にして諸經は網目なり

次に經典信仰に就いての要義としては、經典を教訓として奉ずる者、教法々身の思想を有する者、眞言としての思想を有する者あるも、その結歸は教行義の法本とし尙ほ進んで佛陀三輪の妙化として信仰すべきなり。由來經典には六塵爲經、三塵爲經の說あり。理は文字を絕すといふものと、六塵即實相と立つるものあるは、法の經を論ずるものにして、色の經は教行義の三義を結束して示されたるものなり。而して上人の宗義に就て注意すべき要點は、(一)法華經を能詮即ち教行義の本とし、題目を所詮即ち三輪妙化の結晶として見ること、(二)淨土、眞言、天台よりの影響點と獨創點とを明らむるに在り。かくて法華經と上人の妙判とに依りて經典觀を示さば、教法的信仰、總持的信仰、觀念攝取の信仰及び本佛三輪の妙化としての信仰(教行義の法本としての信仰)に就いて述べざるべからず。即ち

教法的信仰に就いては、妙經妙判共にその證文多し。而して妙法の子なりと說ける佛陀は、滅歸する四聖若しくは應化非眞佛と判じて迹佛なり、由來經力に就いては眞如力、眞言力、如來力の三面あり。天台は如來二智の妙能を以て經力とし、上人は如來慈悲の妙能を以て經力と敎へ給へり

次に總持的信仰に就いて、妙經妙判を誤解するものあり。开は畢竟(一)妙法は釋尊の

て持言、果分の眞言なることを忘れ(二)眞言思想は法華經の正系の教義にあらず、上人は妙經の詮となさず、劣謂勝見の外道陋の佛、中風の覺者なし、眞言は規模なしと教へられたるを知らず、又(三)三輪妙化の眞意を知らざるが爲めなり

觀念攝得の信仰に就いては、本尊抄等聖判分明なり、觀念として見る者には(一)信智混亂の弊あり(二)事觀は佛陀觀なるを知らず(三)觀念信仰統一の妙義を知らざるなり

三輪の妙化としての信仰に就いては、先づその字義を云はゞ、意輪の慈悲には隨自隨他の二面と、直接、根底、間接の三面あり。この慈悲は慈善根……功德……力となる。身輪には如意珠身、藥王樹身の二身、口輪には天鼓、雷鼓の二說あり。壽量品は全品通じて益等、三世益物を說けり。神力品の結要は如來果分の法にして、即ち三輪妙化の文なり。この他法華全典を通じて三輪の妙化を說けるもの多し。妙判中の佛陀に約して說ける記述を見るを要す。三輪の妙化を示せる妙判又多し。要するに三輪の妙化を以て經典信仰の歸趣となすべきなり(以上第三章)

佛教行法の歸趣に就いては、出世兩善一貫の妙行、信法二行統一の妙行なるとを知るべし。七佛通戒偈は世出兩善一貫の教訓なり。由來佛教は世出混亂の弊あるも、獨り法華經のみ能く佛教全体を調整して世出一貫の思想を發揮せり。これ法華の俗諦開會の妙談なり。尙ほ此の經の來至住と四法成就とを知り、小善成佛の妙義を辨ふべし

又佛教各宗に於ける觀念、信仰の二系に就てその概要を知ると共に、上人がこの二系統一の妙信を教へられたるとを了得すべし(以上第四章)

佛教教理の歸趣に就いては、先づその法界觀に於て、佛界緣起統一の妙觀を知るべし。即ち之れを凡決的理論的に見ずして、道德的に見るを要す。分別品の深信解相はこの妙觀を教ゆるものなり

次に人身觀は、先づ迷悟の因果を信じ、之れに就いて四種の四諦を知り、又業感緣起乃至法界緣起等の說は、天台の一念三千觀に結束せらるゝことを知り、又この一念三千を性具、事具の理論に止めずして、功德化の三千悉是吾子の妙觀として見るべし

佛陀觀は、歷史の法と、權教の說明あるも、結局法華の統一的顯本の佛陀を認むべし

その統一に就いては、之れを宇宙汎神的に見ずして、相對の色身常住と十界應現の

普現色身との兩義を會得し、又理智悲三身の關係に於て慈悲爲正を會得し、その慈悲は三輪の妙化たることを知り、又慈悲に隨自、隨他の二面を見て、近き人世日常の上にも、又如來の最上覺の上にも之れを偶仰し、佛陀の實在を信じて現に護念せらるゝことを了すべし(以上第五章)

統一本尊の顯示に就いては、本尊式の正系は歸依三寶なり、この三寶を一体三寶と見るは觀念系より來れる傍系なり、有相信行の吾宗は、別体三寶を採るべきを領得せよ

又上人の宗旨は三大秘法なり、授戒作法を以てこの三秘を見るならば信行の本尊たると、本佛と妙法との關係とを了解するを得ん

彼の觀念系は、この大本尊を十界互具の觀心本尊、己心本尊と誤認し、眞言系は、妙法の曼陀羅、五字の光明、能生所生等に於て誤解を生じ、人本尊系は、一大圓佛と見て宇宙神敎の見に陷り、或は祖師の魂と誤認せり、之れ等は皆正系を逸して佛陀觀を知らず、三寶式を知らず、授戒作法を知らず、釋尊の持言たるを知らず、信智の關係を誤まり、主觀客觀の區別を辨へざる等の失あり、要するに佛陀觀の正系と敎法系の正系とを辿らば、三寶式と授戒作法に叶へる統一的信行の大本尊を認むることを得ん

これ佛敎本尊式の正系なり(以上第六章)

本論は短少の時日を限りてその概要を講じたるに過ぎざれば、盡さゞる所多からん。されど講ずる所は、本と一宗一派の私論にあらずして、實に佛敎の死活に關する大義なれば、之れを以て啻に言論の上のみに止めず、更に進んで佛敎の興立に資し光明あり活力ある宗敎として人生社會を利導すべく應用あらんことを望む。——

至囑々々

雜報

○早稲田大學の宗教科特設　同大學にては近日宗教科を特設せらるゝ由、這は現下我が宗教界の爲めに特に祝すべく悅ぶべき盛擧なり、由來東京帝國大學文科には已に宗教科の設けあり、又東洋大學は教科專門の大學なるが、この種の學科が我國に於て未だ滿全なる發展を遂げざるとは每に憾としつゝあり、今幸に早稲田に於てもこの種の學科を特設して大に宗教の研究を鼓吹せんとするは聊か吾人の意を强ふするを覺ゆ、希くは宗教の爲め、國家の爲め、社會人類の爲め、世界文明の爲めに貢獻する所あらんとを

因に云ふ先是早稲田大學生は日蓮主義の研究を開き、已に去る四月二十一日我が本多大僧正猊下臨會せられ、又五月十九日も出演せられたり

○茗谷學園の宗義研究　日宗學生の中堅として都下の高等專門の學校に研學しつゝある青年團体たる、小石川茗谷學園にては、學祖の教義を研鑽する目的を以て我が本多大僧正猊下を聘して講話を聽くことせり、即ちその初回を去る五月二十二日に、二回を本月二日に催しぬ、尙ほ每月例會を開くといふ、猊下は先づ自著聖語錄編述の主旨に就いて每回講演せらるゝ由、思ふに向後現日宗の廓清に努ひるものは、この種新進青年團体にあらんか、吾人は一日も早くこれが實現を應幾す

○岡山通信　今回津山本蓮寺主梶木日種師が東京府品川町本宗宗務廳詰として六月二日上任の途次我が岡山通過の際、本行寺主能仁事一師並に總代久城茂太郎、宇垣卯三郎等の諸氏の發起にて當地松の江樓に於て同夜師の爲めに送別宴を開きぬ師は夙に我が岡山教壇とは深き緣故あり、津山在住中能く我が教壇の爲めに努められたれば、その慰勞をも兼ねての宴會なり席上梶木師感謝の辭を述べ、滿座宗義談に宗門經營談に各々自己の抱負を語り、紅裙杯盤の間に斡旋して餘興主客を歡ばしめ　○天與服店主小野君も加はりて異彩を添へ意外の盛會なりき

○財團彙報　翼賛員又は勸募取扱諸子に對し注意を請ふもの二三を擧げむ（品川支所）

一、品川支所より寄附額を報告したる「統一」をその翼賛員へ進呈し來りし內、住所不明等の事由を以て返送を受くるものあり、就ては會員證の交附を受けられたる會員の中に、申込當時の住所を移動せられたる場合は、便宜その旨品川支所へ通報ありたし

又新たに申込書差出さるゝ場合は、その住所は可成詳細に明記ありたし（只た新町村名のみありて大字を畧するもの從來往々ありき、向後は大字あるものは略せざるやう注意ありたし）

一、申込書に「即納」と明記ある分にして未だ拂込を爲さざる向あり、可成速に納金あるやう取計らひありたし

又初回分未納の向も、可成速に納付方取計らひありたし

一、申込書の金額に對する但書には、「特別會員」「通常會員」等の會員の種別を記載する事、又五ヶ年五回に分納の分は別に但書を要せず、その他の即納、月納等の分に限り夫々事由を但書に明記ありたし

一、地方の狀況に依り盆暮等の一定の季節に方り納金せらるゝ向は、此際將に盆季に近きつゝあれば、收納上便宜の爲め、納金取扱の諸子に於て、盆季納金の定めある向へ、今より夫々納金方豫告ある樣取計らひありたし

勸募申込期限は本年七月三十一日なれば、勸募を結了せざる向、又は未着手の地方は速に右期限內に終結する樣努められたし

教學財團基金寄附申込表

（第七回）（品川支所取扱）

護持會員

金八拾圓　千葉縣長生郡二宮本郷本源寺住職　稻葉顯正

金五拾圓　山口縣久保村秋林寺檀家　河村勸藏

正會員

金參拾圓　千葉縣長生郡桂安立寺住職伊藤秀治代　大谷德次郎

通常會員

金拾圓　東京府品川町妙國寺檀家　野村利八

金拾圓　兵庫縣姬路市妙立寺檀家　八杉爲次郎

金拾圓　山口縣久保村秋林寺住職　吉田義寧

金貳拾圓　全縣　全寺檀家　河村安之進
金貳拾圓　全縣　全寺檀家　河村和作
金貳拾圓　全縣　全寺檀家　河村克次
金拾五圓　全縣　全寺檀家　河村拾藏
金拾參圓　全縣　全寺檀家　桑島數之進
金拾圓　全縣　全寺檀家　山下忠治
金拾圓　全縣　全寺檀家　貞木六松
金拾圓　全縣　全寺檀家　古本勝之助
金拾圓　全縣　全寺檀家　大木德太郎

贊助會員

金六圓　東京府品川町妙國寺檀家　大和久熊藏
金六圓　全府　全寺檀家　增淵こう
金五圓　全府　全寺檀家　吉沼たか
金五圓　全府　全寺檀家　寺尾直太郎
金五圓　全府　全寺檀家　渡邊猪之助
金八圓　兵庫縣姫路市妙立寺檀家　八杉留藏
金參圓　全縣　全寺檀家　八杉善次
金五圓　山口縣久保村秋林寺檀家　桑島健藏
金參圓　名古屋市常德寺檀家　淺井ちた
金五圓　京都市建仁寺町五條北入　杉山藤吉
金壹圓　千葉縣市原郡本傳寺檀家　伊藤俊作

申込表中訂正

一月統一附錄、吉井光明寺住職田中榮應とあるは圓能寺住職の誤

敎學財團基金寄附受領表

（第七回）（京都本部取扱）

金四千圓五の二鳥取縣東伯郡東郷村　市橋龜藏
金壹百圓五の一大阪市西高津中寺町遠成寺檀家中
金貳拾貳圓五拾錢五の一千葉縣市原郡姉ヶ崎
妙經寺住職　山本日悟
金四圓全　千葉郡邇田妙本寺住職　鵜澤純貞
金六拾錢全全市原郡姉ヶ崎常敎坊住職齋藤立靜
金貳圓全山口縣都濃郡切山秋林寺住職吉田義孚
金六拾錢全　名古屋市常德寺檀家　淺井ちた
金四圓宛　久留米市本泰寺檀家　安達貞平
三五の一　三木郎　井上房太郎　井上編次郎　平城末吉　田中
五の一　草場宗右工門　辻淺次郎　金貳圓宛　金壹圓宛
川上安右工門　高良むつ
金五拾錢　靜岡縣吉美妙立寺檀家
拾錢　岡山市津山本蓮寺檀家　皆納　完納　戸田たみ　加藤倉吉　全吉田宅次郎　金四
金貳拾錢宛（五六回）安藤幸成　服部金五郎　宮崎賢治郎　妹尾爲吉
金拾圓五の一　山口縣都濃郡秋林寺檀家
安之進　河村勘藏　金四圓宛五の一
貳圓六拾錢　河村和作　金參圓五の一　河村拾藏　河村
克次　桑島數之進　金貳圓宛五の一　河村金
大木德太郎　古本勝之助　金壹圓桑島健藏
貞木六松　山下忠治（以下次號）

發賣書目

文學博士　三宅雄次郎君序
大僧正　本多日生師編（既製發賣）

法華經講義

和裝帙入全八冊洋裝背皮全二冊　正價金四圓
郵稅金二十錢　臺清韓五十錢

古今東西の法華經觀を網羅し特に天台と日蓮との創見を發揮して更に新考案の下に佛敎の積極的統一主義を闡明したるは本書なり

大僧正　小林日至
大僧正　本多日生　合著

顯本法華宗綱要

顯本法華宗宗義の全班を知らんと欲するものは是非本書を一讀せらるべし

和裝全一冊　正價金參拾五錢　郵稅金六錢

顯本法華宗宗務廳發行

顯本法華宗宗制

附寺院住職一覽表

全宗現行の諸則寺院敎師等詳細に記載しあるを以て其大勢を知らんと欲せば一本を購はるべし

全一冊　代金拾七錢　郵稅貳錢

發行所　東京市淺草區南松山町四十五番地　統一團

再版出來

文學博士　姉崎正治君序
大僧正　本多日生師編（既製發賣）

聖語錄

洋裝九百頁　特製金壹圓貳拾錢（目下品切）
並製金八拾五錢　郵稅金八錢

法華は佛敎の綜合歸一を宣し、聖祖は各宗の積極統一を唱へたるもの、その敎義の深遠に且多方面にして、眞意を正明に會得し難きは、實に宗の內外に於ける古今の嘆聲なりき、本書は法華の三部及祖書全集に就て之を整然たる組織の下に類聚編成せられたるもの研究の士も布敎者も、信徒も必ず一讀すべき日宗の聖典なり、今回は誤字を訂正し紙質を改良し、裝釘又大に面目を改めたるを以て其厚さ初版の約三分二となりたれば携帶に至極便利なり

東京京橋南傳馬町三丁目五番地

發行所　須原屋　全淺草南松山町四十五番地　統一團

全　再版出來

統一

第百四十九號

明治四十年七月十五日(毎月一回十五日)發行

明治三十年十二月廿四日第三種郵便物認可 明治四十年六月十五日發行 統一第百四十八號 (毎月一回十五日)

基礎金領收報告

一金壹圓也　北海道小樽山之上町 佐藤力藏殿

右本團基礎金中へ寄贈相成り正に領收候也

明治四十年六月　統一團

廣告

本誌編輯の用務は自今東京府品川町妙國寺內統一團編輯部に於て取扱候間、編輯上の用向は右へ御申込相成度又地方の敎況は盛に御通信相、成度團友諸子に御依賴申上候

四十年六月　統一團

腦脊髓 精神病

帝國腦病院

東京市神田區和泉町

(電話 下谷七一七番)

院長ドクトル齋藤紀一明治卅三年專門學研究の爲め獨逸へ留學卅六年同大學卒業尙進て英佛專門病院を視察兩院にて診察す

精神病 專門

青山病院

東京市青山南町

(電話新橋三六四五番)

(三法堂目印)

●木佛具 金佛具 木像厨子大販賣

佛書表具の元祖

各宗御寺院御入用品一切何にても多少に限不御注文仰付らるべし佛書は申すに不及御肖像書專門

木魚位牌御小賣

小包條例附 郵券四錢 三法堂諸品發賣目錄(進呈)

佛書佛具佛像位牌木魚其種類品有之候に付

注意 一々記載する能はず依て特に佛書正價附發賣目錄書を作製致置候に付御入用の諸君は郵券四錢御送付被下候はゞ迅速進呈仕候此の目錄御用ゐになれば寺院樣方の御入用品一切の買物何程遠方でも座ながら安價にて買はれ升其の正札附の品は左の通り

●佛書具一切●過去帳の類●大般若經●一切藏經●過分●位牌●太鼓●讀經本●佛具一切●釣鐘●半鐘●木魚●拂子●曲彔●香爐●數珠●樂器●扇子●中啓●寶珠●燭臺●佛像●厨子●木像●唐櫃●八ッ橋●自鈴●輪鈴●鬼板●三寶●經机●帳簿●花瓶●香具類●寺院附屬品●裝束●衣類●禮盤●茶器●具足●線香●香具類●正價にて其他何品によらず御用命に應じ外品等は格安に賣買物品を何なりとも取寄せ

三法堂 振替貯金口座第一〇七一番

御各宗御本山御用達

大書佛具表具師

東京中橋小橋三條通

全中島町西入

東下小橋入る

三法堂 藤田總治

三法堂陳列所